

Subject : **Japanese**

Production of Courseware
e- Content for Post Graduate Courses

Paper No. 02 : **日本語学 (Japanese Linguistics)**

Module 12 : **ヴォイス (Voice)**



ज्ञान-विज्ञान विमुक्तये



Development Team

Principal Investigator: **Prof. Anita Khanna**
Jawaharlal Nehru University, New Delhi

Paper Coordinator: **Prof. Prashant Pardeshi**
The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)

Content Writer: **Prof. Shingo Imai**
University of Tsukuba


Content Reviewer: **Prof. Prashant Pardeshi**
The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)

Japanese

Japanese Linguistics

ヴォイス (Voice)

Description of Module	
Subject Name	Japanese
Paper Name	日本語学 (Japanese Linguistics)
Module Title	ヴォイス (Voice)
Module ID	JPN-P02-M12
Quadrant 3	Learn More

 **Pathshala**
पाठशाला
A Gateway to All Post Graduate Courses

Japanese

Japanese Linguistics

ヴォイス (Voice)

Quadrant 3: Learn more

さんこうぶんけん

参考文献

川村大 (2004) 「受身・自発・可能・尊敬—動詞ラレル形の世界—」, 尾上圭介 (編)

『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』 pp.105-127, 朝倉書店.

久野暉 (1978) 『談話の文法』 大修館書店.

白川博之 (監修)・庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (著) (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク.

寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 くろしお出版.

仁田義雄 (編) (1991) 『日本語のヴォイスと他動性』 くろしお出版.

日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法 2 第3部格と構文 第4部ヴォイス』 くろしお出版.

早津恵美子 (2004) 「使役表現」, 尾上圭介 (編) 『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』 pp.128-150, 朝倉書店.

Shibatani, Masayoshi (1990) *The languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.

Washio, Ryuichi (1986) The Japanese passive. *The Linguistic Review* 6, pp.227-263.

Interesting facts

- ニ格：項と付加詞

しえきぶん しゆるい うけみぶん あらわ かく こう ひっすせいぶん ふかし ひひっすせいぶん
使役文と 3種類の受身文に現れるニ格には項 (必須成分) と付加詞 (非必須成分)

こと せいしつ も いか わ しえきぶん
という異なる性質を持つものがあることが、以下のことから分かる。まず、使役文の

しえきしゅ どうさしゅ かく とも さいきだいいし じぶん せんこうし
使役主と動作主 (ニ格) は共に再帰代名詞の「自分」の先行詞になることができる。

(1) 田中さんは子どもに自分の部屋で勉強させた。

(1) の使役文では、「自分の部屋」は「田中さんの部屋」とも「子どもの部屋」とも

解釈できる。これに対して、(2) の直接受身文の二格は再帰代名詞の「自分」の先行詞になることができない。

(2) 田中さんは佐藤さんに自分の部屋でしかられた。

「自分の部屋」は「田中さんの部屋」という解釈はできるが、「佐藤さんの部屋」という解釈はできない。直接受身の二格は付加詞であって、項ではない。このことから、

「自分」の先行詞になれるかどうかで項と付加詞の区別ができる。間接受身文の(3)で

は、「自分の部屋」は「田中さんの部屋」という解釈と「佐藤さんの部屋」という

両方の解釈ができる。このことから、間接受身の二格は項であることが分かる。

(3) 田中さんは佐藤さんに自分の部屋で泣かれて困った。

のうどうぶん かく かんせつうけみ かなら かく ちやくせつうけみ ばあい しょうりやく
 また、能動文のガ格は間接受身では必ずニ格になり、直接受身の場合のように省略
ひぶん かく しょうりやく
 されることはなく、(4) のようにすると非文になる。ニ格が省略できないことも、そ
ぶん せいぶん ひつす こう しめ
 れが文の成分として必須の項であることを示している。

たなか な こま
 (4) *田中さんは泣かれて困った。

も ぬし うけみ かく じぶん せんこうし れい じぶん あし
 持ち主の受身のニ格は、「自分」の先行詞になれない。(5) の例で「自分の足」は
たなか あし さとう あし かいしゃく
 「田中さんの足」であって、「佐藤さんの足」とは解釈できない。

たなか さとう じぶん あし ふ
 (5) 田中さんは佐藤さんに自分の足を踏まれた。

いじょう も しゅ うけみ ちやくせつうけみ かく ふ かし かんせつうけみ かく
 以上のように、持ち主の受身と直接受身のニ格は付加詞であり、間接受身のニ格と
しえきぶん かく こう ひょうめんじょう おな み こと せいしつ も
 使役文のニ格は項であって、表面上は同じように見えても、異なる性質を持っている
わ
 ことが分かる。

● 受身と視点

視点^{してん}は、話し手^{はなし}（1人称^{にんしやう}）に最も置きやすい^{もつと お}。視点^{してん}の置きやすさ^おの階層^{かいそう}は以下^{い か}のようになる^{くの}。（久野1978 など）

(6) 話し手^{はなし} > 聞き手^き > 人^て > 動物^{ひと} > 物^{どうぶつ} > 物^{もの}

文^{ぶん}の主語^{しゆご}には視点^{してん}を置きやすい^おものが来る^くのが普通^{ふつう}である^{うけみぶん}。(7b)では、わざわざ受身文^{うけみぶん}にして、主語^{しゆご}を替え^か、話し手^{はなし}よりも視点^{してん}を置きにくい^お、話し手^{はなし}ではない人^てに視点^{ひと}を置^{してん}いている^おので、(7a)よりも不自然^{ふしぜん}になる。

(7a) 私^{わたし}は近所^{きんじよ}の子ども^こをしかつた。

(7b) 近所^{きんじよ}の子ども^こが私^{わたし}にしかられた。

持ち主^もの受身^{ぬし} (8b) の代わり^{うけみ}に「私の足^{あし}」を主語^{しゆご}にした直接受身^{ちやくせつうけみ} (8c) を作る^{つく}ことも

可能^{かのう}である。しかし、(8c)は(8b)に比べて不自然^{くら}である^{ふしぜん}。これも、「私の足^{わたし}」は話し

手^てである「私^{わたし}」よりも視点^{してん}が置きにくい^おからである。

(8a) 隣となりのひと人わたしがあし私ふの足を踏んだ。

(8b) 私わたしは隣となりのひと人あしに足を踏まれたふ。

(8c) ?私わたしのあし足となりが隣ひとのふ人に踏まれた。

「人」ではなく「物」を主語にすることで，視点の階層に反している (9b) も不自然な

文になる。ただし，(9c) のように人を不特定多数にすると受身文が自然になる。さらに

(9d) のように動作主体を消しても自然である。「物」を主語にした受身文は「非情の

受身」とも呼ばれ，この例のように不特定多数が動作主体になったり，動作主体が表

されなかつたりする場合が多い。

(9a) 田中たなかさんがのコーヒいーを飲んだ。

(9b) ?コーヒいーが田中たなかさんに飲まれたの。

(9c) コーヒいーは世界せかい中じゅうでたくさんの人ひとに飲まれているの。

(9d) コーヒいーは世界せかい中じゅうで飲まれているの。

(9c), (9d)の文はある人ぶんがコーヒいーを飲んだひとという動作のをどどうちさらの側がから描わくかという

ことではなく，主語しゅごの「コーヒいー」が持もっている特とく徴ちゆうを表あらわしている。このようしゅごな主語

とくちょう あらわ ぶん ばあい してん かいそう はん しぜん かんが
 の特徴を表している文の場合は、視点の階層に反していても自然になると考えられる。

つぎ れい ゆうめい ひと つく もの はっけん もの ばあい してん かいそう はん もの
 次の例のような有名な人が作った物、発見した物の場合も、視点の階層に反して物
 しゅご ぶん どうさしゅ
 が主語になることがある。このタイプの文では動作主は「に」ではなく、「によって」
 しめ ばあい ふつう ひと ゆうめい ひと つく
 で示される。この場合も、普通の人ではなく、有名な人によって作られたということが
 もの とくちょう かんが
 その物の特徴になっていると考えられる。

げん じものがたり むらさきしきぶ か
 (10) 源氏物語は紫式部によって書かれた。

た
 (11) タージマハルはシャー・ジャハーンによって建てられた。

せん ねん はっけん
 (12) X線は1895年にレントゲンによって発見された。

ほうこうせい も どうし おく おく つた ほうこく してん かいそう はん
 方向性を持つ動詞「贈る、送る、伝える、報告する」なども、視点の階層に反して
 もの しゅご どうさしゅ かく かく つか かつ
 物が主語になることがある。ただし、動作主はカラ格になり、ニ格は使えない。固い
 ひょうげん つか さんしょう
 表現では「によって」が使われる。(Quadrant1 参照)

たなか さとう おく
 (13) プレゼントが田中さん {から/*に} 佐藤さんに贈られた。

しんさけつか しんさいいん さんかしゃ つた
 (14) 審査結果が審査委員 {から/*によって/*に} 参加者に伝えられた。

してん どういつ ばあい してん かいそう はん うけみ しぜん してん
 視点を統一する場合も視点の階層に反していても受身が自然になる。(14b) では視点

かいそう わたくし ひく こ こ してん どういつ
 の階層が「私」より低い「子ども」になっているが、「子ども」に視点が統一されて

しぜん ぶん いっぽう してん へんか しゅご か あらわ
 自然な文になっている。一方、(14a) では、視点の変化を主語を変えて表さなくてはな

じょうちょう かん
 らないので、冗長な感じがする。

わたし こども こ な
 (14a) ? 私 が子供をしかって、子どもが泣いた。

こ わたし な
 (14b) 子どもは私にしかられて泣いた。

うけみひょうげん せかいてき ぶんぶ
 ● 受身表現の世界的な分布

ちやくせつうけみ せかい おおく げんご せんざい かんせつうけみ げんご
 直接受身は、世界の多くの言語に存在するが、間接受身はごくわずかな言語にしか

せんざい とくしゅ うけみひょうげん い
 存在しない特殊な受身表現であると言われている。
